

○クロバナキハギとヤクシマハギの学名(秋山 忍・大場秀章) Shinobu AKIYAMA & Hideaki OHBA: New combinations to the variety and form of *Lespedeza bicolor* Turcz.

クロバナキハギは1923年中井博士により朝鮮から記載された種である。しかし、既に村田源先生が指摘されているようにヤマハギの変種として取り扱うのが適當と思われる。変種名としては植木秀幹氏が1934年に記載した *L. melanantha* Nakai var. *longifolia* Uyeki (ホソバムラサキハギ) が最初である。しかし、最新の International Code of Botanical Nomenclature (1983) では autonym である var. *melanantha* の学名が、その時に発表された学名 (この場合は var. *longifolia*) に対して優先権をもつと規定している (第57条3項)。従って、クロバナキハギをヤマハギの変種として扱う場合の学名は *L. bicolor* Nakai var. *melanantha* (Nakai) S. Akiyama et H. Ohba が正しいことになる。ところで、ヤクシマハギと呼ばれ栽培されているハギがある。これはクロバナキハギの花色 (黒紫色) が紅紫色となった型である。この型にあたるものは既に中井博士により朝鮮産の標本にもとづいて記載されたベニクロバナキハギ *L. melanantha* Nakai f. *rosea* Nakai がある。ヤクシマハギはこのベニクロバナキハギと区別することは出来ない。屋久島にはこの型の自生は判明していないので、和名には後者を選びたい。

植物命名国際規約について御教えいただきました原寛先生に感謝いたします。

Lespedeza bicolor Turcz. var. **melanantha** (Nakai) S. Akiyama et H. Ohba, comb. nov.

L. melanantha Nakai in Bot. Mag. Tokyo 37: 78 (1923).

L. melanantha Nakai var. *longifolia* Uyeki in Journ. Chosen Nat. Hist. Soc. 17: 54 (1934) (*L. melanantha* Nakai var. *melanantha* is autonomically established at the same time, cf. Art. 57. 3).

L. homoloba Nakai var. *higoensis* T. Shimizu in Acta Phytotax. Geobot. 21: 27 (1964).

L. bicolor Turcz. var. *higoensis* (T. Shimizu) Murata in Acta Phytotax. Geobot. 29: 95 (1978).

f. **melanantha** (Nakai) S. Akiyama et H. Ohba, stat. nov.

Floribus atropurpureis.

Nom. Jap. Kurobana-kihagi (Nakai 1923), Hosobamurasakikhagi (Uyeki 1934).

f. **rosea** (Nakai) S. Akiyama et H. Ohba, comb. nov.

L. melanantha Nakai var. *rosea* Nakai in Tyôsen-Sanrin-Kaihô, No. 122, 25, 32 (May 1935), cum diagnos. jap., nom. illegit.

L. melanantha Nakai var. *densa* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 49: 349 (June 1935).

L. melanantha Nakai f. *rosea* Nakai in Journ. Jap. Bot. 15: 680 (1939), cum diagnos. latin.

Floribus roseis ut in typo (f. *bicolor*).

Nom. Jap. Beni-kurobana-kihagi (Nakai May 1935), Chabo-kurobana-kihagi (Nakai June 1935), Yakushima-hagi (ex Hort.).

Habit. Korea. Prov. Tyûhoku: Rihei circa montes Zokurisan (T. Nakai no. 15000, Aug. 10, 1934, Lectotypus in TI), via inter templum Hôzyûji et Zyôkan-an montium Zokurisan (T. Nakai no. 14698, Aug. 13, 1934, Syntypus (non vidi)).

(東京大学 総合研究資料館植物部門)

□R. M. Schuster (ed.): **New manual of bryology**, vol. 1 (p. 1-626), vol. 2 (p. 627-1295). 1983. 服部植物研究所, 日南. ¥10,000 (vol. 1), ¥11,000 (vol. 2). F. Verdoorn (1932) が “Manual of bryology” を出版して以来約半世紀を経たが, この間に蘚苔類に関する研究は著しく発展した。編者の R. M. Schuster 博士は苔類の系統分類, 植物地理などに関するユニークな論文を多数発表している著名なアメリカの研究者であるが, 現在の蘚苔類学の発展の情況から考えて Verdoorn の “Manual” の現代版を作る必要があることを強調している。vol. 1 及び 2 は一連の通し頁になっているが, 総計21章から成り, 編者自らもその内の 5 章を執筆している。主なものは蘚苔類の化学 (S. Huneck), 苔類の細胞学 (M. Newton), 蘚苔類の遺伝 (D. J. Cove), 蘚苔類の生長生理 (M. Bopp), 植物地理 (R. M. Schuster), 蘚苔類の種の問題と分類の方法論 (J. Szwerykowsky), その他分類, 生理, 形態などに関するものである。残念ながら生態学的な項目は P. W. Richards の “熱帯闊葉林における蘚苔類の生態” のみである。本書は蘚苔類学の現状をふまえ, この上に更に問題の提起などをしない, 将来への発展の基にしようとする意図で編まれており, その目的は十分に果たされている。各々の章には読みごたえのある論文が並んでいるが, 内容充実の程度に関してみるとやや不揃いという感じもある。蘚苔類を研究する人のみならず。蘚苔類を材料として生理学, 細胞学などの研究を行なう人にはなくてはならない文献となるであろう。 (井上 浩)